風土記

〈高知県立歴史民俗資料館〉　第9号　1993年10月1日

土佐の肖像画

吉村　淑甫

〝平安朝から鎌倉時代へかけて大和絵の肖像画のことを「似絵（にせゑ）」と云った。後世に遺さんとする一人物の画像を在りし日の容貌に似せて描くゆえに似絵である。似絵を描くことは当時貴族たちが、詩歌、書、音楽、神楽、競馬などと共にあげるべき教養の一つに位いするものであった。この言葉はやがて人物のみならず牛馬の姿態を写す場合にも用いられるようになった。〟

『肖像画』の著者・宮次男氏は概略そのように書いている。だとすると、似絵とは大よそ今日で云う写生画という言葉に当るとみてよいだろう。こうした古い似絵の伝統は遺るべくして遺り近世画像へも引継がれた。

土佐の肖像画は先ず近世初頭からであった。その第一に位置する肖像画が長宗我部元親の画像であることは周知のところである。元親は慶長四年五月十九日に没したが、翌六月にその子盛親が京都にあって似絵（肖像画）を作らせ、菩提寺・雪蹊寺に納めた。画像の作者は判っていない。狩野元俊（慶安中）とする説もあるが、その説の根拠は不確かだ。線描の点などからみて、いずれ狩野派の一人であっただろうことは推測がつく。

所謂歴史肖像画として、元親像は秀吉に、一豊像は家康に似せて作られたなどとする俗説がある。元親、一豊にかぎらず、当時の武将たちの像容を豊・徳両雄に関連づけて語られることが多い。しかし秀吉像・家康像のもっとも眞に近いとされる画像を、元親、一豊の肖像に比較してみると、痩形、丸顔の差のほかは似たところはいたって少ないことに直ぐ気ずかされる。因みに一豊像は京都・妙心寺のものと山内家蔵の二通りがある。両像ともに夫婦像の形式をとっている。

ここに一つ、一豊の弟・康豊の肖像が菩提寺・要法寺に伝わっている。この像は康豊の孫に当る山内虎助（二代忠義の子）が納めたものだが、作者は不明。上部に前身延山寂照院日乾の賛が添えられてある。これによると、康豊は単なる武将に止まらず、兵に精（くわ）しいと同時に仏道をも兼ねていたと、すなわち彼は武人であるとともに優恤・救済の人であったという。

ところで、この康豊像への感銘は似絵として、実に写実的に描かれていることである。元親像、一豊像に見られぬ線描を超えた絵画手法がとられている。兄一豊像に若し美化された点があるとすれば、これにはそうした配慮が加わっていないとさへ思われる。一豊も実際はこの康豊像に相似した容貌ではなかったかと、ふと思わせられる。なを元親像、康豊像、更に吸江寺蔵の湘南和尚像も、ともに左方向きの姿勢をとっている。そのためいずれも画賛が左から右へ向って書かれている。こうした慣習が当時行われていたものであろうか。

山内家には代々藩主の像が遺されたが、近代になって十五代豊信（容堂）十六代豊範の二像は洋画家（油）によって作成された。豊範像に黒田清輝のローマ字の署名があり、特筆される。又、容堂の顔を描いた素描風の小品が残っている。現物の所在が確められないが写真によって知ることができる。容堂晩年の苦悩の相が如実で、いずれ名のある人の作と思われる。似絵と云えば化政期の諸多の文人の似顔絵を描いた壬生水石の戯筆がたくさん遺っている。一筆描きに類する素画ではあるが、当時文人たちの特徴をとらえていて、今になってみれば貴重な作物として評価されよう。

（平成五年七月記）

―企画展　土佐の肖像画　より―

野本　亮

今回は、県内に現存する桃山～江戸全期（一部明治）の肖像画を一堂に集めました。

ジャンル別に解説しますと、まず、文化・文政期を中心とする文人の群像があります。

十九世紀前半の文化・文政年間は、ほぼ十二代藩主山内豊資の治世にあたります。天明改革後の比較的平穏な時期であり、経済も安定していましたので、武士はもちろん一般庶民にいたる幅広い階層に、学術文芸をたしなむ風潮がみられました。

督学先生と呼ばれ、藩校教授館の学頭を努めた日根野鏡水。鏡水の結成した嗽玉吟社の会員、西村竹所。同じく龍陽上人・僧愛山。藩の教授役松田思斎は、頼山陽とも交わりのある詩人。教授方下役で、古文書取調役の漢学者森本甎里は、谷真潮の影響を受けたといわれています。山崎闇斎の学徒で、江戸詰御番手勤となり、江戸勤務が多かった儒者箕浦立斎。安芸の医家で、酒よりも饅頭を好んだ漢詩人岡它山。江戸で「秦里詩稿」を出版し、梅華因果と称された詩人北原秦里。

池大雅の系統を引き、中山高陽の筆を学んだとされる南画家松村蘭臺。

蘭臺門下の島本蘭渓・岡本池陽・楠瀬大枝は、いずれおとらぬ南画の雄で、大枝の弟子、島崎呉江は文人画家でしたが、門下の壬生水石に影響を与えました。

江戸において蘭式砲術を学び、武市瑞山や坂本龍馬の指南を努めた洋式砲術家徳弘董斎も土佐南画家の一人でした。

山内一族の南邸豊著の書道師範を努めた書家中西半隠。特技篆刻において、山内容堂に、「予と頼山陽と汝を併せて日本三癖也」といわしめた壬生水石など、著名な文人約三〇余名を、肖像画と壬生水石の「土佐交遊諸家像」を写真に撮り、一人一人パネルにしたものを展示しました。

中央の展示ケースには、尾戸焼の創始者、久野正伯の肖像画があります。

正伯は、「摂津高津の人で、来国するや駄馬二頭を引いて国内を巡検し、焼陶の時は自ら槌を携へて窯場に入り、常に器物の不良なものを見いだす毎に破砕した」といわれる人物で、今回は、彼が焼いたといわれる「布袋香爐」（幅十六・五㎝、高さ十七・三㎝）を添えてあります。

戦国大名長宗我部元親～山内歴代藩主の肖像は、一品だけでも目を奪われる程の優品ですが、一同に揃うとまさに圧倒的です。

幕末の志士関係では、絹本着色坂本龍馬像及び、武市瑞山像があります。

ともに、公文菊僊の画ですが、描写の仕方が大きく異なり、比較してみると興味深いものがあります。

公文菊僊は、明治六年一〇月二九日高知城下の鉄砲町に生まれ、高知尋常中学校を卒業後東京に出て四条派を学びました。以来、社会教育の立場から勤王家などの肖像画をよく描きました

徳弘董斎像（個人蔵）

壬生水石像（個人蔵）

ので、土陽美術会本部会員の中でも異彩を放っていました。

公文菊僊作、千頭清臣の賛によるこの龍馬像は、イラスト風に描かれており、ユニークなタッチが独特の面白味を引き出しています。

英文学者千頭清臣の賛には以下のことが記されています。

――――　坂本龍馬について　――――

「人は死んでも子孫に伝わってゆく」（人は一代名は末代）

日本海における我等の輝かしい勝利に先立ち、故皇太后陛下は坂本が彼女の荘厳な態度の前に現れた縁起の良い夢を二晩続けてみたことがあった。

そして、その二晩目、深く敬礼して彼は言ったのである。

「私は陛下の身分低い臣で、土佐に生まれました。名は坂本龍馬といいます。私は陛下が安らかに休まれることを祈願し、帝国海軍の運命に関して、私の能力の限界が許す限り保護に努める所存であります。」

坂本はもういない。しかし、今もなお彼は我々と共に歩んでいるのみならず、その忠義の精神と祖国愛も又、皇国の安寧を守っているのである。

大正五年一月　　千頭清臣

これは、明治三七年二月に勃発した日露戦争の最中、昭憲皇太后が坂本龍馬の夢をみたとされる一件を指しており、このことが同年三月「時事新報」に発表されると、大いに国民の士気が高まったということを書いたものと思われます。

風月縦横（個人蔵）

マント姿の中岡慎太郎像は、明治期の画家、初代五姓田芳柳（ごせだほうりゅう）の作品です。芳柳は本姓浅田氏。名は岩吉。十七歳の時家を出て地方を遊歴した後、帰京して狩野派を習いました。

また、イラストレーテッド・ロンドン・ニュース社特派員として横浜にいたワーグマンから油絵を学び、西洋画法を日本画に取り入れつつ、さらに、当時流行のきざしをみせていた写真による映像を重ね併せることによって、極めてレベルの高い肖像画法を創りだしました。

芳柳が考案した五姓田流の絵画は、当時絹絵とも、写真絵とも、横浜絵とも呼ばれました。

ところで、二世五姓田芳柳が描いた、初代芳柳像の上段には、「翁は天質至誠の人なり　故に其流難困災に逢ひ矣僻の行ありといへども其素質を失ハず終に画を修め是を毫端（ごう）に発す　他人に超過し可傳を成す所以のもの歟（か）否歟（か）　明治二八年二月勝安芳　五姓田翁の像に題す」とあり、勝海舟が芳柳の画業について、他を越えて後世に残るものかどうかと、疑問視している点が注目されます。

さらに、薄い和紙を何枚にも巻いて、穂先の尖った紙筆を作り、その先端で絹絵をこするようにしながら、薄い墨をぼかしていき、顔の皺や凸凹、陰影などを、微妙かつ的確に表現していることなどからみて、確証はありませんが、この作品は芳柳の画法が最高の域に達した頃のものではないかと思われます。

彼の手による慎太郎像は独特の雰囲気をかもし出しています。

中岡慎太郎像（前田年雄氏蔵）

—考古学の視角3—

近・現代の考古学

—近・現代史を掘る—

岡本　桂典

近年の行政発掘調査における中・近世遺跡の全国的な発掘調査の成果には目をみはるものがある。

高知県内においても、最近行われた春野町芳原城跡や南国市岡豊城跡などの城跡や高知空港拡張整備事業に伴う南国市田村遺跡群の中世の集落跡の発掘調査は、マスコミなどを通じて我々に中世の城郭や集落の様相を身近なものにしてくれた。

この中・近世考古学の近年における全国的な動向は、京都帝国大学総長であった浜田耕作氏（一八八一～一九三八）の考古学の定義「考古学は、過去の人類の物質的遺物（に拠り人類の過去）を研究する学なり」（『通論考古學』一九二二年）からすれば当然のことといえるのである。

さて、考古学の定義よりすれば、近代以降の遺跡も考古学の対象となる。そして、現代史もその範中に含まれる。かつ、一九八四年に沖縄県において当真嗣一氏により「戦跡考古学」の提唱がなされたことがある（「戦跡考古学のすすめ」『南島考古だより』三〇）。一九八七年六月には、考古学の専門誌において「特集・現代史と考古学」（『考古学ジャーナル』二七八号）という特集が組まれた。この特集は、第二次世界大戦の遺跡を対象としたものであった。その特集の中から現在、考古学が現代史にどのような取り組みをしているのかを一部紹介しておきたい。当真嗣一氏は、「戦跡考古学と旧役場壕の調査」の中で氏の調査された沖縄県西原村役場の調査例を紹介し、沖縄県における戦跡遺跡の現状と我々の想像を絶する戦争遺跡の保存とその平和教育への活用などについて論じられている。このような調査例は、激戦地の沖縄県のみに留まらず、東京都などでも調査例がある。法政大学伊藤玄三教授は、「現代史を掘る—多摩送信所（法政大学校内）の発掘より—」の中で大学構内に所在する多摩送信所遺跡の送信所はポツダム宣言の受諾を打電した所といわれている遺構について論じられている。また、浅川利一氏は、「第二次世界中の遺跡を発掘する—町田市・田中谷戸遺跡の場合—」の中で一人用退避壕（タコツボ）の調査例を紹介された。

さて、高知県では高知市帯屋町公園地下駐輪場の工事現場において近世から近代の遺構が確認されたことは、先号の「—考古学の視角2—近世考古学」（『岡豊風日』第八号）で紹介したところである。この時、高知市教育委員会社会教育課より近世の遺跡発見の報告を受け、現場を見学させていただいた際に、アスファルトの道路下に赤い焼土が厚く堆積していることを指摘された。これはまさに、筆者のような戦争体験のないものには、始めてみる—衝撃的な—高知市空襲の焦土の堆積であった。それは、私にとって「高知空襲写真」（現歴史民俗資料館展示高知市民図書館蔵）を想起させるものであった。

小生の乏しい知見では、高知県内において第二次世界大戦の遺構が考古学的に確認されたのは、岡豊城跡の二ノ段の発掘調査例を知るのみである。この二ノ段には史跡整備以前に高射砲の陣地跡も残っていた。また、同二ノ段南西部には塹壕跡の遺構が確認された。この時、戦国の世に使われた城跡が、また後の世で戦いに使われたことに因縁めいたことを感じた。

現在、発掘調査ではこれらの近・現代の遺構を「攪乱」という考古学用語で呼称している。はたしてこの用語が適切なのか、考古学の定義からすれば「攪乱」も、また歴史を物語る近・現代の「遺構」なのである。

現代史における考古学の成果は今後、先に紹介した発掘調査の結果などのように、現代史研究の中で重要な資料として活用されていくであろう。

筆者も第二次世界大戦の遺構の一部の発掘調査をする機会を得、どのような形で第二次世界大戦の遺構を保存し後世に残すか、また地上資料に対しても同様に残された課題は非常に多いと考えさせられた。また、戦争の体験地の差により、現代史の一部である第二次世界大戦の遺跡の取り組みに差があるように思えてならない。

なお、第二次世界大戦の遺構の一部の存在を指摘された高知市教育委員会社会教育課の方の先見の明に敬意を表したい。

現在、近・現代の遺跡の発掘調査については、発掘担当者の意向に任されているのが現状であろう。それが行政発掘に反映されるかは別にして、今戦争を体験していない我々が、近・現代史の中に考古学をどのように位置づけていくのか、検討の時期にきている。

考古学も反核運動や戦争について、再度「現代史と考古学」の意義を踏まえて考える必要性に迫られている。

※

═史料紹介═

城下町家扣(四)

吉村　淑甫

蓮池町筋北側分　(注・中種町)

(表口)　(裏行)

西表　弐間半　六間　廿枝屋　鋏義
〃　弐間　六間　油屋　直助
〃　三間　六間　廿枝屋　鋏義
〃　三間　六間　蔦屋　丑太郎
〃　五間　六間　三宮　達助
南表角　六間　五間　村田屋　代亟
南表　拾壱間半　弐拾間　廿枝屋　鋏義
〃　弐間　弐拾間　志和武半太
〃　弐間半　弐拾間　魚啓　幸助
〃　六間半　弐拾間　片山　甚存
〃　壱間　弐拾間　松野　安助

右屋鋪裏続二有

東西五間半　南北拾間　右同人
南表　弐間半　拾間　年季夫　為作
〃　三間　拾間　松村楠五郎
〃　三間半　弐拾間　右同人
〃　三間半　弐拾間　足軽類　源助
〃　六間　弐拾間　大黒　左六
〃　四間　八間　島村辰四郎
右同角　四間　八間　御郡方
東表　五間　八間　右同扣
〃　弐間　八間　改田屋　半次
〃　弐間　四間　御郡方

右屋鋪裏裾二有

東西四間　南北弐間　横山辰右衛門
東表　三間　八間　右同人
西表　拾間　七間　他支配組抜　慶也
〃　五間　七間　山城屋　常亟
〃　弐間半　七間　山城屋　弥三郎
南表角　七間　弐間半　山城屋　常亟
南表　三間半　弐拾間　山嶋佐七郎
〃　三間半　弐拾間　岸本松三郎
〃　三間半　弐拾間　山内太郎左衛門殿家来　宮川　安平
〃　三間半　弐拾間　中野　芳義
〃　五間　弐拾間　飯田　庄六

張紙(安政弐卯年中屋吋之助へ永代売渡)

三間半　弐拾間　黒岩与三郎
張紙(安政三辰年三月廿七日中野米次郎へ永代売渡)
四間　弐拾間　山内左衛門殿家来　南部　幸馬
五間　弐拾間　横川　貞助
三間半　弐拾間　下代類　儀之助
三間　拾間　他支配組抜　直五郎

右屋敷裏続二有

東西三間　南北拾間　竹村丑之助
半間　弐拾間　右同人
三間半　弐拾間　武市　利助
〃　三間半　拾間　右同人
右同角　三間半　拾間半　池内　善次
右東表　三間　三間半　菊屋　彦平
〃　三間　三間半　足軽類　喜久吾
〃　三間半　三間半　橋本屋　庄吾

右屋敷裏続二有

東西三間半　南北拾間　右同人
西表　弐間半　七間　算伝屋　廉之亟
〃　五間　七間　左官　楠太郎
〃　四間半　七間　足軽類　實義
〃　三間　七間　木屋　清次
南表角　七間　五間　尾崎屋　貞平
南表　半間　弐拾間　甜屋　清右衛門
〃　六間半　弐拾間　山本　柳寿
〃　三間半　弐拾間　関川　武次
〃　半間　弐拾間　田村芳右衛門
〃　三間　弐拾間　右同人
〃　三間半　弐拾間　嶋村源次郎
〃　三間半　弐拾間　澤田弥惣太
〃　三間半　弐拾間　久松　兼次
〃　三間半　弐拾間　森本三木亟
〃　三間半　弐拾間　堀内　弁次
〃　三間半　弐拾間　二保　楠吉
〃　三間半　弐拾間　簾屋　元次郎
〃　三間半　弐拾間　吉村　来平
〃　三間半　弐拾間　御飛脚番　勇次
右同角　三間半　拾間　池内　仲次
東表　拾間　三間半　仲　彦三郎

本棚

『土佐画人伝』

甲藤　勇著（高知市民図書館刊）

本書は平成五年一月に刊行された。著者の甲藤氏は「はじめに」のなかで

「天下に名だたる作ばかり金にあかして収集する人もいるが、無理をしなくとも身近な土佐の古書画なら、誰でも心掛けしだいでそこそこ集められるし、見る機会も多い。楽しみながら研究し、再評価もできるわけである。」

と述べられ、気負いなく、土佐の古書画について着実に研究を積み重ねてきたことを述べ、本書でその成果を披露されている。

本書は「狩野派の人びと」、「南画の人びと」、「諸派」、「画僧」から構成され、計六一名の土佐で活躍した画人達について述べられている。狩野派、南画については各項目の書き出しで各派の大要が書かれ、中央画壇、土佐での動向の中で各人について理解しやすいように工夫されている。また、各画人については経歴と師匠の筆致、性格、気質が画に及ぼしたこと、代表作についてなどが述べられ、単なる略歴の羅列に留まらず、読者を引き付けるストーリー性も兼ね備えている。

南画の人びとのなかでは、土佐の化政時代に活躍した文人達の名がずらりとならびそれに比べ狩野派は少し地味な感じがするが、そのなかでも絵金こと弘瀬洞意については多くの紙面をさいている。興味あるのは贋作を描き、お抱え絵師から町絵師に転落する過程である。それをきっかけに独特の画風を確立したという通説から一歩踏み込んで、しかし、絵金は、決して変人でも、無頼で図太い人でもなかったとコメントしている。南画の方では、中山高陽、楠瀬棠園、古屋竹原、壬生水石、橋本小霞、徳弘董斎、河田小龍について詳しい。

巻末には狩野系、南画系その他についての画系が付されており、読者が師弟関係を理解しやすいようになっている。

（定価四五〇〇円）

（曽我満子）

甲藤勇氏は、平成五年八月三十一日にご逝去されました。ご冥福をお祈り申し上げます。

甲藤勇氏は、長年にわたって古書画、古文書の研究を手がけられ、当館の運営審議会委員もつとめられ数々のご指導をいただきました。古書画鑑賞会を主宰、県立郷土文化会館の史料調査、土佐史談会の理事もつとめられました。昭和六十年には長年の功績により県文化賞を受賞されました。

歴史散歩

第九回　比江山親興と比江山城跡

比江山城跡は、国分川に近い比江の東北の山上に位置する平山城である。天正一六（一五八八）年八月二四日の『長宗我部地検帳長岡郡廿枝郷衙府中国分地検帳』によると、「ヒエ山ノ大城本台」に「一所廿代　下山畠　掃部助給」、また「ヒエ山ノ古城二ノ堀四方ホリノ内」に「一所卅九代二分　下ヤシキ　掃部助給」と記され、この時には城として機能していなかったことがわかる。

城主は比江山掃部助親興と言われている。親興は長宗我部国親の弟の長宗我部国康の次男と伝えられている。親興は元親の阿波統一後、阿波岩倉城主であったが、豊臣秀吉が四国平定した後は比江山に帰った。

天正一四（一五八六）年、元親の長男信親が戸次川の合戦で戦死すると、長宗我部家の相続問題がおこった。元親にはあと三人の男子があったが、次男親和は病死し、三男親忠、四男盛親で家督相続をめぐる論争がおこった。盛親は幼少であり、元親が彼を偏愛していたにもかかわらず、容易に後継ぎとはできなかったが、重臣久武親直の賛成を得た。親興がこのことで吉良親実とともに久武に反対し、元親に諫言したが、聞き入れられず誅罰された。親興が処罰された時期は諸説があるが、天正一六（一五八八）年であろうと思われる。これらのことは『元親記』、『土佐物語』からよみとることができる。

城跡には詰、二ノ段、三ノ段、空堀、土塁が残っており、親興を祀った比江山神社がある。

〈土佐電鉄バス領石・植田行き国府小学校前下車東へ徒歩約一五分〉

（曽我満子）

比江山城跡遠景

ニュース

～企画展示室から～

山内家のよろいとかぶと

今夏は、七月二四日から八月二九日まで「山内家のよろいとかぶと」と題する企画展を開催した。

本展は、山内神社宝物資料館所蔵資料のうち歴代藩主所用の甲冑二三点、古く鎌倉時代の兜二頭そして室町時代の鎧二領を借用し、これに高知県立図書館所蔵の御駒初（おのりぞめ）関係資料を加えて展示したものである。

開催期間が夏休み中であったことも手伝って、家族連れで館を訪れる人も多く、一堂に並んだ甲冑に目を凝らしていた。特に、七代藩主山内豊常の童（わらわ）鎧や一一代豊興・一二代豊資所用の豪壮な具足の前で立ち止まる人が多く、また珍しい中世の甲冑や藩政期の御駒初関係資料について質問してくる人もあった。

講演会　池田宏氏「山内家の甲冑」
ＡＶホール　平成５年８月７日(土)

関連企画として、八月七日には「山内家の甲冑」と題する講演会を行ない、七五名の受講者があった。本会では、講師の池田宏氏（東京国立博物館学芸部工芸課主任研究官）が、山内家の甲冑についてその保管の形態から各資料の性格までを詳しく説明、加えて日本の甲冑史のあらましや各種の甲冑の製作方法等についてもサンプルやスライドをまじえて分かり易く解説して下さった。参加者も熱心に聞き入り、閉会後も池田氏に質問してくる者が数人みられた。

最後に、本企画展開催にあたり多大の御協力を賜った山内神社宝物資料館・高知県立図書館の方々並びに池田宏氏に深く感謝申し上げます。

山内家のよろいとかぶと　展示風景

〔歴民館日録〕

月日	出来事
七月八日	土佐観光大学開催
七月一〇日	子ども歴史教室ビデオ映画会「火垂るの墓」
七月二〇日～七月二五日	博物館実習
七月二四日	企画展「山内家のよろいとかぶと」開幕
七月二九日	歴史民俗資料館運営審議会
八月五日	夏休み子ども教室（南国市教育研究所と合同企画）
八月七日	企画展講演会
八月一〇日～八月一五日	博物館実習
八月一四日	子ども歴史教室「かぶとをかぶる」
八月二九日	企画展閉幕
八月三一日～九月五日	博物館実習
九月一一日	子ども歴史教室ビデオ上映会

子ども歴史教室「かぶとをかぶる」

タイトルから自分が兜をかぶることを期待して来館した子どもさんもいましたが、（資料保存のため）実際には、担当職員が甲冑について概要を説明した後、鎧台に五枚胴具足を順次着装していく様子を見学してもらいました。

学芸員が慎重に五枚の胴を一つに組み立て最後にかぶとをかぶせるまで、三〇名の参加者がかたずを飲んで見守っていました。また小学生からたくさんの質問もあり、テレビ局の取材もあって、なかなか活気のある歴史教室を実施することができました。

ユア・ボイス

最近、来館者や研究者の方々から、当館所蔵の古文書を利用したい等のご意見を拝聴することが相次ぎました。当館が高知県の歴史の研究機関としての役割を荷なっていくためには、資料の公開、活用が不可欠です。

資料を利用していただく前段階には、しなければならない作業がたくさんあります。資料の調査や目録の整備といった時間のかかる作業です。当館を継続的に利用していただくために、このような地味ながら大切な作業にもっと力を注ぎ、研究や教育普及に資料を活用していただかなければと考えます。

さて、話はかわり、春先に、越知町黒岩小の古味浩介君の飛ばした風船が当館まで届いたのですが、この風船が運んだ向日葵の種が、当館で芽を出し大きく育ち、この夏花開きました。お知らせすると古味君も大喜びでした。

当館も成長し続ける博物館であるために、館員一同研鑽してまいります。

古味君の向日葵

〔企画展の案内〕

土佐の肖像画

平成五年十月三〇日（土曜日）より十一月二十三日（火・祝日）まで、一階企画展示室において開催します。

戦国大名長宗我部元親～山内氏歴代藩主。文化・文政期の主な文人たち。幕末の志士など。桃山期から江戸期にわたる肖像画を一堂に集め、わかりやすくジャンル別に展示しました。

写真のない時代、その人物の容姿を伝える唯一の表現であった肖像画ですが、現存するものは極めて少なく、大変貴重なものばかりです。また、時代や作者によって、描写の仕方が異なっている点など、見れば見るほど興味がわいてきます。さらに、その人物の息吹を伝えるような書跡や遺品なども併せて展示いたしますので、文化の秋、ご家族連れで是非一度おこし下さい。

入館料は、大人四〇〇円、中高生一五〇円、小学生五〇円（常設展込み）です。

付記

戦国武将は、常に死と隣り合わせという時代の宿命を背負っていたため、できるだけ自らの威光を後世に残そうとしました。

四国内には、数多くの戦国武将がおりましたが、そのほとんどが滅亡したため、肖像の残っている例は稀で、阿波の細川・三好、伊予の河野・村上、そして、土佐の長宗我部・一条ぐらいだと思われます。

今回展示する元親像は、常設展のレプリカではなく、重要文化財の実物を予定しています。本物だけがもつ迫力をお楽しみ下さい。

絹本著色長宗我部元親像（泰神社蔵）

〈利用案内〉

開館時間　午前9時～午後5時
（入館は、午後4時30分まで）

休館日　毎週月曜日（祝日及び振替休日にあたる場合は火曜日）12月28日～1月4日

入館料　一般・400円／中高校生・150円／小学

〔常設展示〕生・50円
団体（20人以上）割引きあり
（療育手帳・身体障害者（1・2級）手帳所持者とその介護者、高知県長寿手帳所持者は無料。毎月第2土曜日は小中高生は無料）

交通機関

高知市中心部から車で約20分。
駐車場（大型バス4台・普通車50台）あり。
バスを利用する場合は次のとおり。

〔県交通〕　船岡南団地発歴民館行き終点下車。
領石・奈路・田井方面行き学校分岐（歴民館入口）下車。
（徒歩5～10分で資料館へ）
新改・白木谷方面行き岡豊橋下車。
（徒歩10～15分で資料館へ）

〔土　電〕

〔図録販売中〕

◆「土佐　古絵図展―描かれた土地の歴史―」展示解説図録
領価七〇〇円　送料一冊二四〇円
頁数二九頁（カラー）残部僅少。

◇「鯨の郷・土佐～くじらをめぐる文化史～」展示解説図録
領価一、〇〇〇円　送料一冊三一〇円
頁数八八頁、残部僅少。

○「常設展示案内図録」
領価一、五〇〇円　送料一冊三一〇円
オールカラーで、総合展示室と民俗展示室の代表的な資料を紹介する。

※二冊以上のご注文はお問合せ下さい。

〈ひとこと〉

南国市夏休み子ども教室では、「火おこし」の準備等で野中美宏先生（稲生小）に大変お世話になりました。来年もよろしくお願いします。（下村）

夏休みの期間中は子ども歴史教室等で、小中学生の皆さんを前に、日常と違った体験ができました。（曽我）

最近、小中学校の先生方が、授業の一環として当館を訪れる姿をよく見かけます。先生も生徒も目が輝いていて何か嬉しくなります。（野本）

平成五年十月一日
編集・発行　高知県立歴史民俗資料館
〒783 南国市岡豊町八幡1099－1
TEL　0888－62－2211
FAX　0888－62－2110